

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06123

研究課題名（和文）聴覚障害の親をもつ健聴の子どもの親子関係の構造と支援の検討

研究課題名（英文）Study on the structure and support of parent-child relationship between hearing children and deaf parents

研究代表者

中津 真美（Nakatsu, Mami）

東京大学・バリアフリー支援室・特任助教

研究者番号：90759995

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚障害の親をもつ健聴の子ども(CODA)は、幼少期より親への通訳役割を担い、親を擁護する認識を継続させることから、親子に役割逆転関係が生じると考え、その構造を検討した。その結果、CODAでは積極的と不可避的の両義的な親を擁護する因子が、親ではCODAへの被擁護因子が認められた。さらに、各因子に関連する諸要因の解析から、役割逆転関係が生じやすい傾向の機序が示され、親子の会話の重要性、通訳頻度を減じる必要性等の支援法の検討を可能にした。

研究成果の概要（英文）：Since CODA has a role as an interpreter for parents from early childhood and continues to recognize defending parents, we assumed the role reversal relationship between parents and children and examined its structure. As a result, it was found that CODA had ambiguous factors, “aggressiveness” and “inevitability” when he or she supported parents, and parents had a factor to be supported by CODA. Furthermore, from the analysis of factors related to each factor, the tendency of role inversion relationship was clarified. And at the same time, it was permitted to examine the importance of parent-child conversation and necessity of reducing frequent interpretation.

研究分野：社会福祉学（聴覚障害者支援）

キーワード：CODA 聴覚障害 障害者支援 親子関係 家族支援 役割逆転 親子関係 手話通訳

1. 研究開始当初の背景

聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (Children of deaf adults : CODA) では、音声日本語を獲得し、併せて親との会話法である手話を獲得することから、幼少期より親への通訳を行うことがある。CODA が担う通訳とは、CODA が親と第三者との間に立ち、双方の言葉を訳して相手方に伝えるだけでなく、第三者の話す内容が親には理解しづらい場合には、分かりやすい言葉に言い換えたり解説を加えたりする役割も求められる。また、固有の価値観や行動様式をもつ聴覚障害のある親と健聴者との間のギャップを認識し、仲介役となるなど、幼少期の CODA が担う通訳とは親にとって欠かせないものとなり、健聴の親子とは異なる特有の親子関係が形成されることがある。

一般の親子関係では、幼小期には親は子どもの養育を担い、子どもは親に守られ親を頼りながら成長していくが、親が障害をもつ場合では、親子の関係性に役割逆転 (role reversal) が生じることがあり (例えば土田ら, 2011)、CODA 親子もまた同様の様相を呈することが、親子それぞれの語りから質的に示された (中津・廣田, 2012)。さらに、CODA では、親を擁護する意向を強く有するほど、親から心理的に自立する時期が長期化することが事例的に示された (中津・廣田, 2014)。近年、一般青年においても自立時期に遅れがみられるモラトリアムの長期化が問題視される傾向にあるが、CODA に対する指摘は、決して健聴の親子関係と同様の問題として看過すべきではなく、背景にある CODA 固有の状況を考究し、CODA と聴覚性のある親との関係性の構造を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、CODA の親子関係に係る成長発達過程において、最も個人差がみられる青年期に着目し、CODA と親の双方を対象として質問紙調査を行い、CODA の親子関係の機序を構造化する。具体的には、CODA の通訳役割に関わる親子関係因子と心理的状況因子および関連する要因を検討して、親子関係を規定する諸要因の構造を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

CODA104名 (男性39名、女性65名; 年齢平均 29.04歳±4.95)、聴覚障害のある親97名 (父親41名、母親56名; 年齢平均 55.40歳±8.66) の計201名を対象とした。

(2) 質問紙の作成

質問紙は、CODA 調査用と親調査用の2種とした。

CODA 調査は、I. 基本的属性、II. 通訳役割の実態、III. 心理的状況、IV. 親との関係性の編成とした。親調査は、I. 基本的属性、II. 心理的状況、III. CODA との関係性の編成として、親子の質問項目の構成は可能な限り対応させた。

評定項目は全て5件法を用い、24歳以上のCODA と、24歳以上の子どもをもつ親の対象者へは、後方視的方法にて回答を求める形式とした。

質問項目は、CODA 調査、親調査ともに、筆者らの先行研究で生成されたカテゴリまたは概念と既存の尺度を用いて独自作成し、聴覚障害学専門家8名で内容的妥当性を検討して確定した。CODA 調査は72項目、親調査は45項目とした。

(3) 実施方法

無記名自記式質問紙調査および無記名 web 調査を実施した。Web 調査には、REAS (リアルタイム評価システム: 放送大学提供) を使用した。

調査依頼は、①全国47都道府県の聴覚障害者団体を通じて聴覚障害のある親へ依頼し、親経由でCODAへも依頼 (無記名自記式質問紙調査)、②CODA のセルフヘルプグループを通じてCODAへ依頼し、CODA 経由で親へも依頼 (無記名 web 調査) する方法のほか、③機縁法 (無記名自記式質問紙調査または無記名 web 調査) にてCODA および親へそれぞれ依頼した。なお、質問紙調査の郵送では、CODA と親それぞれの個別封筒を用いるよう求め、回答のバイアスを回避した。

(4) 分析方法

質問紙調査項目のうち、心理的状況の項目では、CODA と親の心理的状況について、探索的な因子分析 (一般化最小二乗法、プロマックス回転) を用いて解析した。親との関係性の項目では、CODA と親の関係性について、探索的な因子分析 (一般化最小二乗法、プロマックス回転/主成分分析) を用いて解析した。

また、親子関係因子と関連する要因（性別、年代、同胞数、出生順位、通訳頻度、会話法）について、t 検定、一元配置分散分析等を用いて検討した。さらに、CODA と親の関係性因子を規定する諸要因の構造について、ピアソン積率相関係数の検定、重回帰分析（ステップワイズ法）を用いて解析した。

4. 研究成果

質問紙の回収件数は、全国 47 都道府県の聴覚障害者団体からは、CODA57 件（回収率 24.3%）、聴覚障害のある親 77 件（回収率 32.8%）であった。J-CODA および機縁法からは、CODA47 件、聴覚障害のある親 20 件であった。

（1）CODA 調査

CODA 側の心理的状況因子は 3 因子が抽出され、「F1 社会的関係での親の障害への困惑」、「F2 親の障害の受け入れ」、「F3 自律を選ぶ」と命名した。心理的状況と関連する要因の検討では、「F1 社会的関係での親の障害への困惑」は、親と会話が十分に成立しない CODA の方が高く、「F2 親の障害の受け入れ」は、手話と聴覚口話の会話方法を併用して、親と問題なく会話が成立する CODA の方が高かった。

CODA 側の親との関係性因子は 2 因子が抽出され、「F1 親を積極的に擁護する」、「F2 親の無力さにより不可避免的に擁護する」と命名した。

CODA 側の親との関係性構造（重回帰分析）では、「F1 親を積極的に擁護する」因子は、両親とも聴覚障害者であり、年齢が高く、親との会話成立レベルが高くて親の障害を受け入れる要因に規定された。「F2 親の無力さにより不可避免的に擁護する」因子は、親との会話成立レベルが低く、通訳頻度が高くて、社会的関係での親の障害への困惑を有する要因に規定された。また、年齢が高く、親との関わりを回避する要因に規定された。

以上のことから、CODA 側の「F1 親を積極的に擁護する」認識は、CODA が通訳役割に促進的に関わり、親と良好な関係を築く関係性のほか、役割期待に過剰に適応し、自身を抑制して親を積極的に擁護するといった関係性が推察された。また、「F2 親の無力さにより不可避免的に擁護する」認識からは、親からの通訳の役割期待を避けるような、良好とはいえない親子の関係性が示唆

された。

（2）親調査

親側の心理的状況因子は 2 因子が抽出され、「F1 子育ての困惑・不安」、「F2 障害に対する引け目」と命名した。親の心理的状況と関連する要因の検討では、「F2 障害に対する引け目」は、母親より父親の方が高い傾向にあった。

親側の CODA との関係性因子は、1 因子が抽出され、「CODA への被擁護」と命名した。

親側の CODA との関係性構造（重回帰分析）では、「F1 CODA への被擁護」因子は、子育ての困惑・不安が高く、高年齢で障害に対する引け目がある要因に規定された。

以上のことから、親側の「CODA への被擁護」の認識は、親自身が消極的な心理状態にあることで、健聴の CODA を頼るといような関係性が示唆された。

（3）本研究の意義と今後の課題

本研究では、CODA が親に対して行う通訳役割に基づいた親子関係の構造を解明した。CODA のみならず聴覚障害のある親の調査を実施したことで、親子相互の変数を加えた視点を提供することができたといえる。さらに、本研究の結果により、CODA の通訳頻度を減じる取り組みや、親側の障害の受け止めに関する教育等の支援法の検討を可能にした。

今後は、縦断的研究による、CODA と親の経年的な発達経過の検討が必要であろうと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者および連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ① 中津真美, 廣田栄子：聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（CODA: Children of Deaf Adults）の通訳役割にもとづいた親子関係形成に関する研究動向. コミュニケーション障害学, 第 33 巻 2 号, 74-81, 2016（学会依頼論文、査読無）

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 中津真美, 廣田栄子：CODA の親子関係の類型化と関連する要因の検討, 日本リハビリテーション連携科学学会第 18 回大会（筑波大学, 東京都）,

2017年3月

- ② 中津真美, 廣田栄子: 聴覚障害の親をもつ健聴の子どもの会 (J-CODA) の活動と支援に向けた組織間連携, 日本リハビリテーション連携科学学会第18回大会 (筑波大学, 東京都), 2017
- ③ 中津真美, 廣田栄子: CODAの通訳役割に基づいた親子関係の構造: 役割逆転の観点から, 日本リハビリテーション連携科学学会 (国際医療福祉大学, 栃木県), 2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中津 真美 (Nakatsu Mami)
東京大学・バリアフリー支援室・特任助教
研究者番号: 90759995

(4) 研究協力者

廣田 栄子 (Hirota Eiko)
野原 信 (Nohara Akira)